

幼児・児童期における環境教育の新たなる展開に向けて — ESD先進国ドイツの活動事例に学ぶ —

川添 敏弘*, 尾崎 司**, ランブレスト・マティアス***, 大澤 力****
(平成20年9月30日受理)

New Development in Environmental Education of Infants and Children —Learns to the Activity Case in Germany, an Advanced Country in ESD—

KAWAZOE, Toshihiro OZAKI, Tsukasa MATTHIAS, Lambrecht and OSAWA, Tsutomu
(Received on September 30, 2008)

キーワード：持続可能な開発のための教育 (ESD), 幼児, 環境教育

Key words: Education for Sustainable Development (ESD), infant, Environmental education

はじめに

2005年から国連・持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development: 以下, ESD) の10年がスタートした。このESDは、2002年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議 (ヨハネスブルグ・サミット)」で日本が提案し実施計画文書に盛り込まれたもので、これを契機として、第57回国連総会で決定されたものである。持続可能な開発・発展 (Sustainable Development) という概念は、1987年にブルントラント委員会報告書「我ら共通の未来」のなかで用いられ、「将来の世代が自らのニーズ充足する能力を損なうことなく、現在の世代のニーズを満たすような発展」と定義されている。

従来の環境教育とESDとの大きな違いは、1つには、問題解決には、環境だけを考えるのではなく、開発、人権、ジェンダー、平和などの地球的問題群の相互の「つながり」を重視した点である。1992年リオ・デ・ジャネイロで開催された「環境と開発に関する国連会議 (地球サミット)」で、持続可能な開発/発展 (Sustainable Development) を実現させるための具体的な行動計画 (Agenda 21) が示されて以来、「地球環境」という言葉が一般にも意識され、問題の解決に向けては、環境だけでなく、開発、人権、ジェンダー、平和などの地球的問題群の相互連関性に着目することがさらに意識されている。

2点目として、個人のライフスタイルの変革だけでなく、経済・社会・生態系などの社会システムを変革するという

視点があげられる。すなわち、行動し、社会参画することで、社会を創り変える「学び」が重要とされている。1997年の「成人学習に関するハンブルグ宣言」では「人間中心の開発並びに参加型の社会」をキーワードに様々な問題について学び、参加型社会を形成することが強調されている。

このような国際的な流れのなかで、環境教育もESDへとシフトしつつある今日、総合学習等の機会や地域社会やNPO・NGOとの連携により、日本の学校教育でもESDがすすめられつつあるが、概念が現場にあまり浸透していないのが現状である。また、幼少期からこうした取り組みをおこなうことが大切だと認識されていても、小学校の実践事例は報告されているが、幼児期の環境教育での実践報告はほとんどなされていない。

そこで本稿では、ESDの考え方をもとに、幼児・児童期における環境教育の新たなる展開を考えるためにおこなった、一連の教育研究活動 (アクション・リサーチ) について報告する。第1段階として、ESD先進国であるドイツの教育現場を実践調査し、第2段階では、ドイツの教育現場を見、聞き、肌で感じるなかから得たものをプログラム化し、日独の教育実践交流のシンポジウムとして開催した。そして、これらの知見から幼児教育現場で実施できそうなアクションプランを第3段階として考えた。

1. ドイツにおける先進的活動事例の実践調査 (第1段階)

平成19年8月6日~15日、ESD先進国であるドイツで環境教育がどのように行われているかを目的に、トリアー、ハノーバー、ベルリンの幼稚園 (保育園) や学校教育の現場および環境教育施設を訪問し、実践調査をおこなった。ここでは、ベルリンの「緑が学校を作る」とハノーバーの

* 児童学科・保育科 資料室

** 保育科 保育実習研究室

*** トリアー大学第二学部日文学科

**** 保育科 保育内容研究室

学校生物教育センターについてふれたい。

1) 「緑が学校を作る」(ベルリン)

「緑が学校を作る」は、ベルリン市役所の教育、青少年、学術、研究、教育相談所と社団法人ブリッツ野外研究所との共同によるプロジェクトである。そして、「緑が学校を作る」は、校内空間を改造したいと考えている学校に対して環境プロジェクトを立案おり、ベルリンにおいて長きにわたって最も成功している環境教育活動の一つである。実施にあたっては、情報を提供し、相談を受け、助言を与えている。特に子どもにとっての適切な自然のつくり方の指導を通して、エコロジーを学ぶ校内空間の改造方法について助言を与えていることが特徴といえる。

「緑が学校を作る」では、1983年創設以来、コンクリートの敷かれた校庭のコンクリートを取り除く処置の方法や、そこをファンタジーに富んだ子どもに適切な遊び場所、運動のできる場所につくりかえる方法についてアドバイスを与えてきた。その中で、学校において地域を活用するための研修会(学習会、未来工作所、講演、ワークショップなど)を催すことにも力を入れてきた。また、校内空間改造にあたっては、計画し実施していくために、ランドスケープ・プランナーや関係してくる役所、組織(自然保護団体)などとの協力を得るための調整やそれに附随してくる問題などに対処している。そして、生徒達を中心に、教師や保護者、学校の周辺地域を含めたかたちで、校内空間の改造の計画から実行まで全行程に参加してもらう。授業でもそれぞれの科目(数学、生物、理科、物理、科学、美術、工作など)の中で活用することによって、このプロジェクトが学習と学校生活に結びついていくのである。

このように「緑が学校を作る」では、子ども達が自らの生活環境・遊び環境を主体的に変革することによって教育効果が得られている。そして、自然物を利用しながら学校空間を活用することを重要視している。また、コンクリートや画一的な遊具に囲まれた校庭をエコロジカルで芸術的な空間へと作りかえることにより学校教育そのものに変化が生まれるというのである。例えば、リーダーであるクール氏によれば、コンクリートで押し込められた空間に緑を増やした結果、生徒の暴力的な行為が減少したという。さらに、見通しはよいが殺風景でコンクリートで固められ、自然体験の乏しい学校空間が、子どものこころの発達を保障し、育んでいく空間へと発展し続けることが目標とされている(図1, 2)。

2) 学校生物教育センター(ハノーバー)

生物教育センターは、ハノーバー市の公的な施設である。ここは広い敷地を活用し、五感の感覚すべてに刺激を与えることを目標として、直接体験を中心とした学習活動プログラムが組まれており、幅広い年齢層が研修できる施設である。そして、センターには研修ハウス、動物飼育小屋、



図1. 1990年代の学校(上)と工事後(下)の写真
(「緑が学校をつくる」より提供)



図2. 改造後の小学校の校庭

野菜やハーブ園、熱帯温室、ミツバチの飼育舎など様々な展示物がある。他にも多くの展示物があり、プログラムの豊富さを示している。

センターの庭園は全体がビオトープとして機能しており、その中にも自然物による実験的な展示が様々に試みられている。例えば、図3は土の厚さが植物(雑草)の生育にどのように影響するかを観察するものである。土の厚さにより、植物の種類や背丈までもが変化することが認められた。そして、図4は1ヶ月に1回、順番に土が耕されている展示である。つまり、手前は1ヶ月前に耕されたスペースであり、いちばん奥は4ヶ月放置された状態である。雑草の

生える様子だけでなく、季節によって生える雑草が違うことも観察できた。図5はバケツコンポストである。枯れ木や葉、紙、ペットボトルやプラスチック類が分別されて入れている。毎年、バケツが作られていくことで、これらの物質がどれくらいの時間で分解されるのかを観察することができるので、子どもたちは学年を追う毎に毎年、実感を持って気づきを得ることができる。これらは手軽にできる環境教育教材として注目に値する。



図3. 階段状の雑草園



図4. 季節の雑草園



図5. バケツコンポスト

まとめ

2005年より「ESDの10年」がスタートし、EUを牽引するESD先進国と言われるドイツにおいて、様々な取り組みが本格化している先進活動事例を実際に見て、肌で感じることができた。ベルリンでは半数以上の学校が上記で紹介した「緑が学校を作る」の援助を受けて活動しているという。しかし、日本では、ESDが浸透していると言える状況ではなく、ましてや幼児・児童期の教育においてはこれから導入が期待される状況である。この実踏調査を通じて、日本の幼児教育へのESD導入は、「園庭・校庭」をキーワードにすすめてはどうかというアイデアが浮かんだ。そこで、これから持続可能な社会を築いていくために幼児・児童期の教育における生活環境を、園庭(校庭)に着目してシンポジウムを実施することで提案できると考えた。

2. シンポジウム企画・プログラム化(第2段階)

2005年に「ESDの10年」がスタートして以来、日本でも地球規模の問題群に対して、小中高、大学、社会教育の分野では様々な取り組みがなされている。しかし、幼児期の取り組みはほとんど報告されていない。また、児童期の取り組みも十分であるとはいえない状況にある。そこで、幼稚園・保育所の園庭、小学校の校庭に着目し、そこから広がる取り組みが、幼児・児童期におけるESDを確かなものにするのではないかと考え、シンポジウムを企画した。

シンポジウムでは、ESD先進国ドイツの取り組みを紹介し、日本の取り組みとの交流も発信しながら、持続可能な社会を築いていくには、どのような子どもの生活環境が必要なのかを参加者と共に考えていった。

プログラム	
11月17日	
14:00~	記録映画上映会
15:00~	基調講演
18:30~	交流パーティー
11月18日	
10:00~	パネル・ディスカッション
13:00~	分科会
A	園庭の空間づくり実践例
B	五感を使った環境教育
C	食農保育
D	園庭ビオトープ
E	ESD入門
16:00~	全体会

図6. シンポジウムのプログラム

第1日目は、東京都東村山市立第八保育園での記録映画を上映することからシンポジウムを開催した。この映画は、東村山市立第八保育園の園庭を舞台に繰り上げられる食農保育をカメラにおさめたドキュメンタリーである。まずはドイツから招聘した二人の講師に日本での取り組みを紹介

することで、日本での活動の一つを伝えることを目的とした。それから、両氏による基調講演を行うことで、幅広い意見を得ることができると考えた。また、プログラム終了後には、東京家政大学の学生が主体となって地域社会の中で取り組んでいるコミュニティ・カフェ「茶の間」から提供された食事を囲んでの交流パーティーを行った。

基調講演「幼児・児童期における環境教育のデザイン—園庭からはじめるドイツ ESD の取り組み」での主な提言は以下のとおりである。

オルトルート・クール氏からの提言

「緑が学校を作る」とは、コンクリートや画一的な遊具に囲まれた園庭(校庭)・遊び場を、学校や子ども、市民、地域の芸術家などが参画し、エコロジカルで芸術的に空間を作りかえる組織である。この活動を通して、子ども達は自らの環境を主体的に変革する中で、学校教育そのものが変化してゆくのである。

「緑が学校を作る」の第1原則は「自助のための援助」をすることである。教師陣、生徒、保護者を含め、学校の周囲を含めた形で校内空間の改造に参加している。活動として、「スポンサーの斡旋、資金援助への示唆」、「専門家、関係する役所、芸術家等のコンタクト」、「必要な材料の調達法の示唆」、「他の学校との意見交換の場所作り」、「改造後の校庭の案内」、「国内外からの視察者の案内」、「改造の計画、実施時における調整」、「教師対象の理論と実施に向けての研修会の催し」、「出版物の販売」、「改造実施に必要な機具、機材の無料貸し出し」などがある。

ヨルク・レーダーボーゲン氏からの提言

生物教育センターの教育コンセプトは「どんな活動も、子どもの五感の感覚すべてに刺激を与え、直接的な体験を通して、年齢に応じて学ばせる」というもので、この考え方が様々な展示や学習・活動プログラムに活かされている。例えば、「校庭コンポスト」や「客土の厚さモデル」、「フィーリングロード」、「さわれる岩石園」、「香りと感触の植物庭園」、「断面からの池の生き物観察小屋」、「野鳥営巣観察小屋」、「人体薬草園」など、様々な切り口で工夫された展示がなされている。そして、センターで大切にしている環境

1. 感覚体験の場であること。
2. 自然の中で遊びながら学べる場であること。
3. アーティスティックであること。美的追求心があること。
4. 環境利用の方法について学ぶ場であること。
5. 自分がここで感じた自然を記録できる場であること。(記録方法: 記載の他にスケッチや粘土作品、写真など)
6. 森や湖などの自然がもつ精神的な意味について学ぶ場であること。歴史の中でそれがどのように人間の文化や生活に関わってきたかを学ぶ場である。
7. 科学的探究の場であること。

図7. ドイツの環境教育の7つのポイント

教育の7つのポイントが提示された(図7)。

第2日目は、「子どもの環境と持続可能な社会づくり」をテーマにパネル・ディスカッションをおこなった。園庭(校庭)や子どもの生活空間に造詣の深いパネリストを迎え、それぞれの専門分野からテーマに関して提案してもらい、討論を行った。そして、持続可能な社会を築いていくために、今、子どもの生活環境には何が必要なのかをフロアの参加者と一緒に考えていくこととした。パネル・ディスカッションでの提言を受け、分科会では、さらに理解を深めることができる機会を提供し、全体会で各分科会での学びを共有した。

パネル・ディスカッションでは、ESD-J(「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議)理事である浅川和也氏がコーディネーターを務め、パネリストは、ドイツからは前述のオルトルート・クール氏とヨルク・レーダーボーゲン氏に、日本からは、東村山市立第八保育園園長で「食農保育」を実践する野村明洋氏、広島ゲーンズ幼稚園の教員で「日本生態系協会・第3回学校ビオトープコンクール」で文部大臣賞受賞に導いた高田憲治氏、東京都北区にある赤羽自然観察公園の設計・建設・維持管理活動に従事するなど快適なまちづくりに取り組んでいる亀井裕幸氏で議論を交わした。

パネル・ディスカッション

それぞれの専門領域から発言と実践活動の紹介がなされ、広い領域での様々な活動が有効、かつ必要であることが確認された。クール氏からは、多くの成功を一度に起こすのは難しいが、一つの成功事例が説得力を持ち、全体を変えることが可能となるという話がされた。ヨルク氏からは、ESDにとらわれすぎず、子どもたちの感情や感動に訴えること、心に訴えていくことが大切であることが話された。野村氏からは、「食農保育」が保育園内での「食」ととどまらず、近隣の人たちの協力が広がっていく話と、それらによって子どもたちが地域で生きているという実感を得ることにつながっていったという話がされた。高田氏からは、幼稚園でのビオトープ活動の全容の話がされ、都会でもそこにあるものを取り込むことで自然の豊かさを伝えることができるということが話された。亀井氏からは、公園整備を行う時に、その持続性をどのようにとらえていくか、地域をどのように活用するかの話がなされた。

これらの議論を受け、より深い理解を求めて参加者に、興味のある分科会へ参加してもらった。各分科会で実施された概要は以下のとおりである。

分科会

分科会Aでは、「園庭の空間づくり実践例」をテーマに、空間設計の専門家としての視点から、オルトルート・クール氏によるワークショップがおこなわれた。園庭(校庭)の空間デザインの観点から、プロジェクトの中から豊富な

事例を紹介してくれた。これまで多くの初等教育の場としてのグラウンドを、子ども達の感性をみがく庭へと変えてきた実績を活かして、大学の校舎建設予定地広場などを実際に想定して環境の活かし方やその実現に向けてのアドバイスなどが提案された。

分科会 B では、「五感を使った環境教育」をテーマに、ヨルク・レーダーボーゲン氏によるワークショップがおこなわれた。匂いを嗅いだり、味わったり、音を聞いたりすることで、その素材を知ったり、人間の多様な感覚・感性の違いについて確認することができた。また、カードを使ったアクティビティでは、カカオがコーヒーになるまでにどれだけ多くの人達が関わり費用やエネルギーがかかっているのか知り、自分たちが普段口にしているものの始まりにいる人達（開発途上国）の生活について意識していくことの大切さを参加者は考えさせられた。

分科会 C では、食と農が保育内容となる「食農保育」を実践し、発信する野村明洋氏から、「子どもと環境」についての提言がおこなわれた。「食農」で大切なのは、農業の体験、調理の体験、食の体験の3つであり、栄養を中心に考えるのではなく「みんなで」活動することを重視しているということであった。そして、自分が求めることを言い続けることが大切で、そうすることで少しずつ実現していくこと、そして、園内で活動を完結させるのではなく、近隣の農家と共に活動することが、より発展的な育みにつながるという話がなされた。

分科会 D では、高田憲治氏より、「園庭ビオトープ」での最近の活動が紹介されるとともに、「自然にゆだねる」活動についての紹介がなされた。豊かな自然をつくるために移植したケヤキが台風で簡単に倒れたり、ホタルを復元したりする活動のなかで、高田氏は「不自然」を感じることもあり、それから豊かな自然について考え続けているという。そして、実態としての自然が前面にでやすいが、それらをどのように理解し展開していくかということが大切であるという提案がなされた。

分科会 E では「ESD入門」として、浅川和也氏によるワークショップがおこなわれた。国際理解教育や開発教育、グローバル教育における参加型の手法を用いて、地球規模の問題についてESDの視点を学ぶことができた。特に、「食」をテーマにしたワークショップからは、人によって視点や考え方に違いがあったり、グループによって主要となるテーマが違ってくることを知ることができた。

全体会

それぞれの分科会での提言が発表され、全体会ではそれらに対する総括や質問など、活発な意見交換がなされた。ここでは、政治的・文化的・地理的な背景の違いからくる、ドイツと日本での取り組みの違いや、日本でのこれからの活動のあり方などについての意見が交わされた。ここでは、

その一部を紹介したい。

「ESDには広い枠組みがあるが、何をもって幼稚園の活動をESDとするのか」という多くの人が抱いている疑問に対して、いくつかの答えが示された。ESD-Jの浅川氏は、この疑問に対し、ひまわりのような図(図8)の中心にある丸の部分のESDとは何かと問うている疑問であり、全容の中の活動可能な分野で何ができるのか知ることが重要であるということが指摘された。そして、ESDがわかってから活動を始めるのではなく、それぞれの分野で活動しながらESDを考えていくことが大切であり、幼稚園ではその枠組みの中で何をどうやっていくのが求められると話された。また、このような各分野の人たちが活動することで、総合的なESDがデザインされていくのではないかと提案された。さらに高田氏からは、知識として理解していても行動に起こせない人が多いのは、知識と理解は違う生活行動をつかさどっているからであり、そのようにならないためには、原体験を通して情動や価値観などを突き動かされることが幼児期にあるべきであるということが指摘された。そして、ヨルク氏からは、ESDにとらわれすぎず、子どもには感情や感動に訴えることが大切であることの必要性が伝えられた。

このような質疑を通して、ESDに対するこれからの発展的な取り組みを双方が実践していくとともに、ドイツ・日本の交流を深めていくことが約束された。

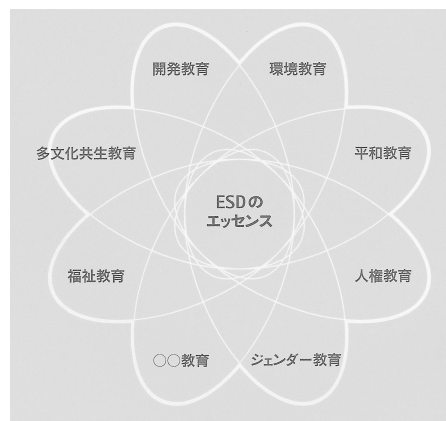


図8. ESDのエッセンス (ESD-J, 2006)より引用

シンポジウムの振り返り

ESD先進国ドイツでの先駆者であるクール氏とヨルク氏を招聘してのシンポジウムから、私たちは様々な知見を見いだすことができた。

クール氏が所属する「緑が学校をつくる」による自助のための援助を原則にした活動は、子ども達が自らの環境を主体的に変革していくなかで、学校教育そのものが変化し向上していくことが理解できた。そして、この変革には子どもや地域のアーティストが積極的に参画していることが特徴的であった。

こうしたことを考えると、校庭や園庭は子どもの五感・感性に働きかけ感性をみがく空間としての機能があり、親をはじめ地域の人、芸術家、そして子どもの参画の舞台となる可能性を秘めている。日本での園庭ビオトープや食農保育の舞台はまさにそのことを示唆しており、こうした可能性を追求する空間づくりをすすめていくなかで、ESDを考えていかなければならない。

ヨルク氏が所属する生物教育センターが行なっている、どのような活動も五感に刺激を与える直接体験が重要であり、年齢に応じて学ばせていく必要があるという提言は、多くの参加者が共感を持ったに違いない。しかし、何をどのように展示し、それから何が学べるのか、子ども達から大人まで楽しめる活動とはどのようなものなのかは、今後、議論していく必要がある、発達段階に応じたESDの展開を考えなくてはならないだろう。

また、ヨルク氏が分科会で実施したワークショップでは、身の回りにあるものに対して疑問を持ち、考えていく姿勢が大切であるとともに、それは開発途上国へのまなざしへとつながるものであった。このような開発教育と五感の教育、自然に感動しそれを大人たちが援助していく「センス・オブ・ワンダー」の視点をふまえた、教材や方法論を考えることが大切になってくる。ESDに特徴的な、こうした教材や気づきを促す教育方法が今後の教育を変えていく原動力になっていくだろう。

ESDにつながる保育や幼児教育として、日本でも食農保育や園庭ビオトープといった取り組みが、子ども達の身近な環境である「園庭や校庭」の可能性として示されたことは大きな収穫である。園庭のど真ん中に「田んぼ」をつくり、食と農の営み、そして食文化や農業から発展する遊びの文化の伝承は、ドイツのESD活動家の目にも新鮮で高く評価されていた。それぞれの国や地域によって、取り組み方は多様であるので、日本の独自性を活かしたESDを発展させていくことも重要な課題である。

もともと日本には、その気候風土に根差した自然豊かな持続可能な環境として、例えば里の周囲には里山が存在していた。研究メンバーの振り返りの中でも、こうした里と里山の良さをイメージした園庭(校庭)の概念として、「里庭」という概念でまとめ、考えていくのはどうかという提案もあった。

ともあれ、子どもたちの身近な環境からESDに連なる保育や教育を展開していく仕組みを考えていかなければならない。

3. 幼稚園でのアクションプラン (第3段階)

第1段階、第2段階を振り返り、さらに身近な幼児教育の現場で実践できないか、アクションプランを考えた。

東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園では、これまでビオトープを中心とした様々な活動を展開してきた。不耕起栽培での稲作活動やビオトープ池での小さな生き物との関わりからは、多くの子ども達の育ちを観察することができている。しかし、シンポジウムを受け、そこからさらに発展的な活動をどのようにおこなうか検討し、「土」に触れる感覚から、社会の仕組みを変えていくことに連なる活動を幼少期から体験させたいと考えた。

まずは、東村山市立第八保育園の「食農保育」で実践されていた稲作活動を参考に発展させたいと考えた。これまで184×92cmの容器でおこなっていた不耕起栽培では、足を汚すことなく田植えをおこなっていたが、今回は田んぼビオトープの改造を行い、新たに220×180cmの枕木を利用した田んぼをつかった。本年の5月には、園児が足を土に埋めながらの田植えを実施することができた。ほとんどの園児が初めて体験する土の感触に様々な反応を示してくれたのは成果であるが、園庭スペースのビオトープをこれ以上拡張することが難しく、より発展的な園庭作りをどのようにおこなうが課題となった。

そこでESDを念頭にエコロジーをテーマに話し合いがおこなわれた。テーマを水、風、土の三つにしぼり、検討を重ねた結果、田んぼ活動と関連のある「土」をテーマとすることになった。実施したのは「ミミズ・コンポスト」である。「ミミズ・コンポスト」を用いることによって、幼稚園から出る生ゴミを肥料として価値の高い有機堆肥に変えることができる。そして、できあがった堆肥を使えば、農業の基本である土壌における有機物の循環を実体験で学ぶことができ、食育につなげることもできる。何よりも、子どもたちがその循環のプロセスに参画する仕組みをつくるのが大切であると考えている。現在、絵本などでの導入を済ませ、子どもたちによるコンポストへの絵の具アートを実施することにしている。これからは、生ゴミが変化する様子を観察し、芋ほり活動までにミミズとの関わりを広げていくことを計画している。

また、予算をかけずにできる生物教育センターでの様々な試みを参考にすることも考えている。例えば、「フィーリングロード」や「バケツコンポスト」、「雑草園」などからも、様々な知見を得ることができる。このような活動を、少しずつでも実践していくことが、将来的にESDとしての活動に結びついていくと考えている。さらに、幼稚園として取り組み始めた保護者による園庭菜園活動を、将来的に、子どもたちのビオトープ活動と関係性を持たせていきたいと考えている。

このような活動を通して、単なる「飼育」・「栽培」といった環境教育活動をESDへと広げて実践し、幼児教育に関わる教員がまず変わってくることが大切であると感じている。新たにESDの視点を持つことで、これまでと違

う園庭での活動が展開できると実感している。

おわりに

地球規模で起こっている様々な問題は、自然を犠牲にした経済至上主義的なバランスの悪い社会システムが原因ともなっている。この社会の仕組みを変えていくことに連なる活動を、幼児・児童期から体験し参画する態度を養うことはきわめて重要である。そのために教育者は、これまで以上に、子どもたちが自ら考えることができる力を育ていくための援助者としての役割も持つ必要があるのではないだろうか。そのためには、幼児・児童期の教育に関わっている教育者は、問題意識を持ち、様々な問題の相互連関性、とりわけ「遠い」と感じられる開発途上国との「つながり」を意識していかなければならない。そして、「飼育」や「栽培」という活動から「地域とのつながり」、「地球とのつながり」へと子どもたちの意識を高めていくように、枠組みを広げていく必要がある。日本での持続可能な社会を築いていくためには、幼児・児童期の教育に関わる人た

ち、教育者や保護者、地域の人たち一人ひとりが、ESDを意識していく仕組みをつくるのが急務であると考え、

今後もドイツをはじめ、様々な人々と連携し、日本での実践活動も含め、今回の研修やシンポジウムを活かした研究を継続していきたい。

なお、本研究の一部は科研費番号060925の助成をうけ、実施されたものである。

引用・参考文献

- 日本ユニセフ協会（ユニセフ日本委員会）：開発のための教育—地球市民を育てるための実践ガイドブック，教育出版，1998
- 塩瀬 治：ビオトープであそぼう—生物のすみかをみんなでつくる 3.気持ちよく生きることとビオトープ，星の輪会，1997
- ESD-J：ESDがわかる！「国連持続可能な開発のための教育の10年」キックオフブック，2006，p20

Summary

In this study, we placed much importance on our activities in Germany, which is an advanced country in ESD. 1st-step reports the results of our field survey conducted in Germany. 2nd-step discusses the symposium we hosted in Tokyo. 3rd-step introduces some practical activities based on the results of 2nd-step. Then, we examined the scope for environmental education for infants and children in the days ahead.